

『うひ山ぶみ』の初稿本『濃染の初入』に関する覚書

杉戸清彬

はじめに

「『うひ山ぶみ』の初稿本『濃染の初入』——書誌と翻刻——」と題するものを『椋山女学園大学研究論集』第二二二号第二部に載せてもらったのは、昭和五十六年三月のことである。それより前、昭和五十年十月には『うひ山ぶみ』に関する一考察——初稿本『濃染の初入』を通して」と題して口頭発表も行ったが、手厳しい批判を頂戴した。それでも本文の紹介をする価値はあると思つて活字化したのが、昭和五十六年の、先に記した翻刻である。それから今日まで、特に考えが進んだということではないが、内容について、現時点で述べ得ることを以下に記してみたい。

## 一、書誌関係事項の概略

『うひ山ぶみ』が、『古事記伝』という畢生の大著を書き了えた本居宣長が、門人達の要望に依って国学の学び方を説いた書物であることは言うまでもない。その『うひ山ぶみ』には、三種類の草稿本があり、すべて本居宣長記念館の所蔵である。

筑摩書房版『本居宣長全集』第一巻の解題（大野晋氏による）では、巻初に「十月八日始」、巻末に「十月十三日書終」とある一本、及び、巻初に「十月十三日書始／十ノ廿六板下書ハシム」と記す一本が、それぞれ「初稿本」「再稿本」として紹介された。しかし、同全集第四巻の解題では、右二本以前の草稿本と目される『濃染の初入』の発見が報告され、この本こそ「初稿本」であり、前二本は、それぞれ「再稿本」「三稿本」と考えるべきことが、大野晋氏自身の手で記述された。

この『濃染の初入』は、『玉勝間』一の巻及び三の巻の、板下直前の浄書稿（大野晋氏の解説による）の裏を利用して書かれており、墨付三十二丁（巻末に遊紙一丁）の内、第二十五丁までは『源氏物語玉の小櫛』三の巻から七の巻までの草稿（部分）であり、第二十六丁から第三十二丁までが『濃染の初入』部分になっている。第二十六丁の右端に「濃染の初入」という題号が、本文上端と同じ高さに記され、その少し下、本文の中段より少し上の高さに僅かに右に寄せて「うひ山ぶみ」（濁点も付いている）という別書名が、書かれている。再校本、三校本とも、「うひ山ぶみ」と改称したことは確かなことだろう。再稿本、三稿本には濁点がないが、やはり初稿本の濁点を尊重して「う

ひ山ぶみ」とするべきだと考える。岩波文庫は「うひ山ぶみ」とするが、やはり濁点を付した方がよいと思う。以上の大筋は、先の翻刻の際にも書誌として記したが、つけ加えた所もある。

## 二、内容の概略

板本『うひ山ぶみ』は、先ず総論を述べ、その本文の必要箇所に(イ) (ヤ)の「相じるし」を付け、次にその(イ) (ヤ)で指示された部分を細説するという形式になっている。これに対し『濃染の初入』は、○印で示される14の段落に分けて説を展開するという形である。そのような形式上の相違は、草稿本から完成形態に到る間の、記述方針の変化、または整序意識の高まり等の面から説明し得るものと思われ、記述内容に直接関わるものとは考えなくてもよいと思う。

『濃染の初入』に書かれていることを、宣長の付した○印のまとめりに簡条書きの形で示せば、大体次のようになるかと思う。

(一) 「物学ビ」の四分類(1、「神代紀ヲ旨トシテ神ノ道ヲ学ブ」。2、律令、官職などについて学ぶ。3、故実、装束、調度などについて学ぶ。4、「歌ヨムコトヲモハラトシテ歌書ヲ学ブ」。)及び「和学」「国学」という呼称が適當ではないこと。

(二) 「神学」が、儒道に依拠し続けてきたことへの批判。漢意を去るべきこと。

(三) 律令、官職、儀式、装束、器物等の学び方。

(四) 和歌には「近キフリ」と賀茂真淵以来の「万葉ブリ」、また今は「大体古今集ノコロノフリニシテ、シカモ古

今ブリニモアラザル一種」もあること。また、万葉、「世々ノ集」「物語フミ」を学ぶ「歌学」もあること。  
(五) 学問の筋(対象)に勝劣はなく、その手順にも定法はないこと。「ハゲミツトムル」ことが大切で、才、不才も努力次第では大きな問題ではないということ。

(六) しかしながら、優先すべきは「古へノ道」の解明であり、そのためには『玉くしげ』等の自著を読んで儒仏にとられぬよう心の準備をした後に「神典」を読むべきこと。賀茂真淵の学問が、万葉にとどまってしまったこと。しかし真淵の教えに習って古事記を尊重すべきであり、そのために自ら『古事記伝』を著したこと。日本書紀も漢意に注意しながら読まねばならず、それ以下の史書をも見るべきこと。及び、諸書を読む順序について。

(七) 「道」を知るために万葉集を重視するという、師真淵の教えについて。言と心と事が「相叶ヘル」ものであり、「古ノ道」に到るにはこれを知らねばならないこと。自ら古風の歌や文を作るべきこと。

(八) 和歌を詠むのは無益だとする輩、また、「風雅ノスヂニマツハレテ」道のことを考えない輩への批判。

(九) 「道」の学びとは離れて、歌だけを詠むことを前提とした場合の注意すべき点について。歌は「詞ヲウルハシクト、ノフル道」であり、記紀に残るのは「スグレタルカギリ」の歌である、ゆえに、後世である現在においては尚更努力して「ヨキ歌」を工夫して詠むべきこと、題詠も不可欠である。

(十) 後世の歌を一概に悪く言うべきではないこと、万葉・古今・新古今にはそれぞれ良い点があり、一方に極めつけることはできず、それは、桜、紅葉のどちらにも賞すべき点があるのと同様であること。

(十一) 古歌は「白妙ノ衣」後世歌は「色ニ染メタル衣」の如くで、優劣はないこと。また古今集中の古い時代の歌を学ぶべきこと。及び古今集以後の撰集の評価(後拾遺まで)。

(十二) 古風歌は「万葉ノ中ニテモ、安ラカニシラベオダヤカナルスガタ」を範とすべきであって「コトヤウナル」

言葉は使うべきではないこと。

(十三) 古風を詠むためには、後世歌を学ぶのが却って効果的であり、古風と近風が「混雑」するのは最も避けるべきこと。

(十四) 後世風を詠む場合にも、歌の家や宗匠にとらわれるべきではないこと、宣長自身、「近キ世ノ掟」には関わらず、「近キ世ノ歌」は評価しないこと。

引用符をつけて片仮名交り文になっているものは『濃染の初入』からの引用である。昭和五十六年の翻刻によるが、濁点は今補った。

以上の如くだが、大きく分けると、(八) までと (九) 以下の二つになると思う。(九) の書き始めは次の如くである。

○歌ヲ以テ道ヲ明ラムル助トスルコトハ既ニ云リ、又、道ノタメノ事ハ姑クオキテ、タゞ歌ヲヨムスヂノ道ニツキテモ心得ベキコト山々アル也<sup>ベキ</sup>

宣長自身、これ以降は「道」のことは措いて、歌詠についてのみ述べると断っているのだから、『濃染の初入』を書く宣長の姿勢が、ここで大きく転換していると考えてよいであろう。

以上、要するに『濃染の初入』の前半は、「古への道」を学ぶことが重要なこと、そのための方法、並びに「道」のために『万葉集』を重視する理由などが説かれ、後半においては、古風歌と後世歌にいかに対するか、その基本的姿勢が説かれていると言えよう。

### 三、『濃染の初入』と『うひ山ぶみ』

『濃染の初入』と現行の『うひ山ぶみ』を比較して、気付いた点を記してみたい。

先ず、『濃染の初入』には、契沖への言及が全く見られないという点が注意される。

契沖について述べる『うひ山ぶみ』の細説部（カ）は次の如くである。

古学とは、すべて後世の説にか、はらず、何事も、古書によりて、その本を考へ、上代の事を、つまびらかに明らむる学問也、此学問、ちかき世に生まれり、契沖ほふし、歌書に限りてはあれど、此道すぢを開きそめたり、此人をぞ、此まなびのはじめの祖ともいひつべき、次にいさ、かおくれて羽倉大人、荷田東麻呂宿禰と申せしは、歌書のみならず、すべての古書にわたりて、此こゝろばへを立給へりき、かくてわが師あがたるの大人、この羽倉大人の教をつぎ給ひ、東国に下り江戸に在て、さかりに此学を唱へ給へるよりぞ、世にはあまねくひろまりにける、大かた奈良朝よりしてあなたの古の、もろくの事のさまを、こまかに精しく考へしりて、手にもとるばかりになりぬるは、もはら此大人の、此古学のをしへの功にぞ有ける、

（『うひ山ぶみ』の引用は、筑摩書房版全集による。但し、漢字は通行の字体に改め、濁点も、原文にない場合には必要に応じて補った。）

『うひ山ぶみ』の中でも特によく知られている所であり、契沖以来の国学の道統が簡潔に書かれている。このような契沖以下の道統を述べる所が、『濃染の初入』には見られない。

契沖については、『うひ山ぶみ』の細説部（オ）にも次のように見える。

然るに近く契沖ほふし出てより、此学（歌学をさす——稿者）大にひらけそめて、歌書のとりさばきは、よろしくなれり、

右の二つの引用を見て、注意されるのは、前の引用には「歌書に限りてはあれど」という言葉があり、後の引用には「歌書のとりさばきは」という言葉があつて、契沖学の範圍が「歌書」に限定されていることである。

この点に注目すれば、契沖は直接「古道」とは関わらなかつたという意識が宣長にあつたから言及がないと考へてもよいように思う。

『濃染の初入』に登場する賀茂真淵は、古道研究の前提として『万葉集』を研究したという位置付けになっており、この違いが、二人の扱いに相違の生じた理由と考へられるのである。

このような観点からすれば、『濃染の初入』は、古道に到る道を説くという姿勢が明白であつたと言ふことができる。特に前半部においてそうだったと言えよう。『うひ山ぶみ』は、より広い観点から国学の歴史を述べたと言ふこともできる。

第二の相違点として、『濃染の初入』には「階梯」という言葉が出てこないことに注目してみたい。

『うひ山ぶみ』では細説部（ヤ）の中に「階梯」という言葉が見られる。

すべて人は、雅の趣をしらでは有べからず、これをしらざるは、物のあはれをしらず、心なき人なり、かくてそのみやびの趣をしることは、歌をよみ、物語書などをよく見るにあり、然して古人のみやびたる情をしり、すべて古の雅たる世の有さまを、よくしるは、これ古の道をしるべき階梯也、

ここでは、「古道」を知るためには、歌を詠み、物語書をよく見て、「古人のみやびたる情」「古の雅たる世の有さま」

をよく知ることが、踏むべき段階だと言うのである。

右の文中の「歌」は必ずしも古風歌のみを意味しない。それは「物語書」と並列されていることから明らかだと思ふが、宣長には次のような言もある。細説部（ノ）から引用する。

後世の歌に至りては、実情をよめるは、百に一も有<sup>ッ</sup>がたく、皆作りごとになれる也、然はあれども、その作れるは、何事を作れるぞといへば、その作りざまこそ、世々にかはれることあれ、みな世の人の思ふ心のさまを作りいへるなれば、作り事とはいへども、落るところはみな、人の実情のさまにあらずといふことなく、古の雅情にあらずといふことなし、

ここでは、後世歌も「古の雅情」だという道筋が述べられている。

今一箇所、総論部の最後の部分を引く。

古学の輩は、古風をまづむねとよむべきことは、いふに及ばず、又後世風をも、棄<sup>ス</sup>ずしてならひよむべし、——（中略）——又伊勢源氏その外も、物語書どもをも、つねに見るべし、すべてみづから歌をもよみ、物がたりぶみなどをも常に見て、いにしへ人の、風雅のおもむきをするは、歌まなびのためは、いふに及ばず、古の道を明らかにする学問にも、いみじくたすけとなるわざなりかし、

今更言ふ必要のないことかもしれないが、「階梯」となるべき「歌」は、古風、後世風の区別をしないのである。

『濃染の初入』で、右に該当するような論を展開するのは、（八）として要約した部分だろう。引用が多くなるが、お許し頂きたい。

カクテ世ノ物理学スル人ノヤウヲ見ルニ、道ヲ学ブ人ハ、夕、漢風ノ議論空理ヲノミタツネテ、歌ヨムヲバ益ナキ

アダゴトノ如クヒテ、<sup>(思)脱カ</sup>万葉集ナドハヒラキテモ見ズ、サル輩ハ、タ、漢意ニオチテイサ、カモ古ノ意ニハカナハ

ズ、人ガラヘンクツニカタクナニナリテ、ヤハラビタル風雅ノ趣イサ、カモアルコトナシ——(中略)——道ヲ  
タフトミ尋ヌルモノハ、必古ノ歌ヲシラデカナハヌコト、上ニ云ルガ如ク也、

右の引用に見られるように古道を学ぶ者は、和歌を無益なものとし、万葉集をさえ開き見ることがないので、人柄も偏屈で固陋となり、「ヤハラビタル風雅ノ趣」が全くないというのである。

「階梯」論で問題になるのは、和歌一般と物語であるから、万葉集さえ見ないことへの批判は、それ以前の段階の話になるのかもしれないが、『濃染の初入』では万葉集を詠まねばならないという議論は、賀茂真淵の教えとして(七)の段落に詳述されているので、宣長としては「古道」を知るための道筋として既に十分に説き了えた所であった。次の段階としては、後世歌と物語が「古道」といかに関わるかが問題になつてくる筈である。しかしながら、『濃染の初入』には、そのような論は見えない。

先に、(九)の段落からは後半部に入り、その書き始めが「○歌ヲ以テ道ヲ明ラムル助トスルコトハ既ニ云リ」であつて、それ以後は専ら歌詠についての論であることを述べた。そのような中では、後世歌や物語が「古道」と関係するという論は出る余地がないのである。

つけ加えれば「物語」という語は次の一箇所にのみ見える。(四)の段落から引用する。

又、歌ヲヨムコトヲノミモハラトハセズ、ソノ道ノ事ヲ明ムルスヂヲ歌学ト云、コレハ万葉集ヲハジメ世々ノ集、又物語ブミ等マデニアル事ヲアキラメラシル学問ナレバ……(以下略)

ここは、四つに分類した「物語ビ」の内「ソノ道」「歌道」をさす一稿者)を明らかにしていく「歌学」の中に「物

語「ミ」を研究することも入るといふのであり、「古道」との関連は見出せない。階梯論は未だ形をなしていないと考へざるを得ない。

以上、『濃染の初入』と『うひ山ぶみ』を比較して、契沖が出てこないこと、いわゆる階梯論がまだ形を為していないことについて述べた。両本を比較考察したというには未だ不足の部分が多いと思うが、なかなか踏み込めない。再校本、三校本も併せて考えを進める必要もあり、今後の課題としたい。

『濃染の初入』という、『うひ山ぶみ』の初稿本があることは、筑摩書房版全集の解題によつて周知のことであり、私なりにその翻刻も行なつた。しかし、その本がどのような内容のものであるのかという報告は、管見の範囲では今日まで為されていない。今回、文字通りの小考を提出するが、御批正を得れば幸いである。